

7月の主な論点

コロナ危機は、人が密集する都市の脆弱性を炙り出し、集中と効率を追求する社会のあり方に警鐘を鳴らした。本研究会ではこれまで、分散型の地域構造へと議論を進めてきたが、今後は、その実現に向けた道筋を描いていく必要がある。

人口・産業が集積する大都市、豊かな生活が営まれる郊外・地方都市、自然に囲まれた農山漁村、そして山・川・海の大自然。これら多様な地域を擁する兵庫が目指す分散型の地域構造の具体像と、その実現に向けた課題について検討する。

1) 地方回帰は進むのか

今後、リスクの高い都市、特に人口が過度に集積する東京から地方へと人が移る流れは、社会のデジタル化と高速交通網の一層の充実と相まって、一定進む可能性がある。一方、都市は今後も人々を引き付ける力を持ち続けるだろう。地方回帰は一時的な脱「東京」に止まらず、大きな社会潮流となるのか。

2) 「分散型の地域構造」の意味

なぜ「分散型の地域構造」が必要なのか（例：災害リスクの低減、通勤ラッシュなどの過密の解消、自然豊かな暮らしの実現等）。

兵庫がそれを目指す意味は何か。兵庫が目指す「分散型の地域構造」はどのようなものであるべきか。県内の大都市、郊外・地方都市、農山漁村それぞれにどのような暮らしが営まれる地域をイメージすればよいか。

3) 「分散型の地域構造」の問題点

「分散型の地域構造」の問題点を洗い出し、その対応策を考える必要がある。

特にインフラの問題をどう考えるか。人口密度が下がるほど、道路、上下水道、通信、医療、消防、教育等が非効率になると考えられる。この課題を乗り越えることなしに、分散居住の未来を描くのは難しい。やはりコンパクト化が必要ではないか。

4) 「分散型の地域構造」を導く取組

「分散型の地域構造」の実現に何が必要か。「分散型の地域構造」を導くために必要な施策はいかなるものか。国が果たす役割との棲み分けを図りつつ、県としてどのような取組を進めるべきか。

5) 地域の魅力を高める方策

居場所の自由度が高まるということは、逆にその中で選ばれる地域になるために、それぞれの地域の魅力がより強く問われる時代になるということでもある。

それぞれの地域の魅力をどのような方向で伸ばしていくか。また、地域の魅力を高めるために、どのようなエリアマネジメントが求められるか。